



長野幼稚園の七夕祭りでの食育活動の様子

人とのつながりで 広がる可能性

福岡のイベントで親子で鯉節を削り、茶節にして食べるという食育活動に参加したことがあります。そのときの反応が驚くほど良かったのを今でも思い出します。これをきっかけに、自分でも鯉節普及のために何かできないかと強く思うようになり、現在、枕崎水産加工業協同組合の広報委員をさせていただいています。

広報委員会では、「枕崎鯉節」マークを利用した携帯ストラップやボールペン、シールなどの制作に携わったほか、鯉節の製造工程の写真や絵画をポストカードにしたものを現在制作中です。

このような活動をしていく中で、他分野の人たちと“つながれる”のも魅力の一つです。その中で多くのことを吸収し、仕事にも還元できたらと思っています。

鯉節の製造も広報も一緒。「ある程度のものはいつも通りすればできる。それに少し工夫したら可能性は広がるんじゃないか」そんなことをいつも考えながら取り組む日々です。

若者に期待すること

枕崎水産加工業協同組合で品質規格・広報委員長を務める大石克彦さん(54)は、若者への期待を次のように話します。

「組合では、品質規格委員会や広報委員会などに積極的に若手を登用し、意見を取り入れるようにしています。ときには、私たちの世代ではついていけないような斬新なアイデアが出ることもあります。しかし、これからはそのような新しい発想

が必要なのかもしれません」

品質規格委員会で生まれたものの一つに、多くの方がご存知の「枕崎鯉節」マークがあります。商品パッケージやポロシヤツ、Tシャツ、携帯ストラップなどに使われていて、「枕崎鯉節」の知名度アップに貢献しています。

また、広報委員会で若手委員を中心に、学習や観光などに活用できる、全鯉節工場を記した「鯉節マップ」作りを進めているそうです。

「まち中で、一般の方が『枕崎鯉節』マーク入りのポロシヤツやTシャツを着ているのを見かけると嬉しいですね。これからは『枕崎鯉節』を業界全体でさらにアピールしていく、ブランド化を推進していかなければなりません。その中で市民の方々

の応援は心強いです」と大石さんは話します。

本物の味を 子どもたちに

7月7日、長野幼稚園で行われた七夕祭り会場の一角に、枕崎青鯉会による鯉節削り体験コーナーがありました。同会は44歳以下で構成される鯉節屋の後継者の集まりで、現在32人の会員がいます。若い力を生か

本物を 知り伝え育む

し、多くの人に鯉節のすばらしさを知ってもらうための活動をしていて、園児や小学生を対象にした食育活動は3年前から定期的にを行っています。

この日は同会の約10人が参加し、園児に鯉節削りのコツを教えたり、鯉節が使えるまでを特徴のパネルを使い説明したりしていました。会場では親子や兄弟で鯉節を懸命に削り、削りたてをおいしそうに味見するほどのとじた姿が見られました。同会の中村公治会長(43)は「家庭で鯉節を削ることも今では少なくなっています。子どもたちには、削る楽しさ、本物のおいしさを知ってもらいたい。今後も鯉節に親しむ機会を提供していきます」と話します。

7月15日には、福岡県から南さつま市にキャンプで訪れた小学生の団体に対し、鯉節削り体験を実施。児童らは削る前の鯉節を見るのが初めてだったようで「堅くて驚いた」、「木みみたいだけど鯉節の香りがする」とい

った声が聞かれました。削った鯉節は茶節にしておいしくいただき、中には、何度もおかわりをする児童もいました。

日本一鯉節に詳しい 枕崎市民になろう

300年超の歴史を刻んできた「枕崎鯉節」。その製造法は当時から変わることなく、脈々と受け継がれてきました。

しかし近年、私たちの食生活は大きく変化し、鯉節がなくても家庭で味噌汁が食べられる時代となりました。消費者のニーズは常に変化し続けています。さらに、資源の枯渇問題や冷凍カツオの価格高騰など、明るい話題ばかりではありません。

このような中で枕崎は、日本一の産地としての確固たる地位を築いてきました。それは、先人たちが引き継いできた歴史に、その時々若者の新しい活力が注がれていく、その積み重ねなのかもしれません。

「枕崎鯉節が日本一」と堂々と語るように、私たちは日本一鯉節に詳しい枕崎市民になるべきではないでしょうか。まずは家庭で削ることからはじめてはどうでしょう。一人ひとりができることから始めましょう。



枕崎青鯉会会長
中村公治さん



福岡県の小学生への食育活動の様子(南さつま市)



立秋水産株式会社
立石健太郎さん(33)